

Relevance and Modality

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1995-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4257

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「関連性」とモダリティ

河野 武

1. 序

Sperber & Wilson (1986) によって規定された「関連性」の概念をもっとも直接的かつ具体的に出す手段はイントネーションである。河野 (1994) では、まず、「関連性」は言語的にはモダリティ R によって表され、命題に関して R は〈主張〉されたり〈質問〉されたりすることを述べた。さらに、R が関与する発語内行為と抑揚型との間には相関関係があり、基本的に、R の〈主張〉と下降調が対応し、R の〈質問〉と上昇調が対応するとした。また、R が話者・聴者のいずれと関与するかの様態の違いが抑揚型の細かな使い分けに反映することを述べた。本稿では、これらの知見を踏まえ、より広い視野のもとで関連性モダリティ R と真偽性モダリティおよび発話モダリティとを対比させ、それぞれがどのような形で「関連性」に貢献するかを見る。

2. 「関連性」とモダリティ

Sperber & Wilson (1986) は、通常の言語コミュニケーションは次のように規定される「関連性」を達成するための行為であるとする。

(1) *Relevance to an individual* (comparative)

Extent condition 1: an assumption is relevant to an individual to the extent that the contextual effects achieved when it is optimally processed are large.

Extent condition 2: an assumption is relevant to an individual to the extent that the effort required to process it optimally is small.

(Sperber & Wilson (1986: 145))

「関連性」を決定する条件のうち、コンテキスト効果に関する条件は命題

内容と直接に関わる。処理の負担に関する条件は、命題内容も関わるが、情報の提示の仕方などの発話の形式と様態により多く関わる。すべての発話が「関連性」に支配された行為であることの保証は次のような前提によって与えられる。

(2) *Presumption of optimal relevance*

- (a) The set of assumption $\{I\}$ which the communicator intends to make manifest to the addressee is relevant enough to make it worth the addressee's while to process the ostensive stimulus.
- (b) The ostensive stimulus is the most relevant one the communicator could have used to communicate $\{I\}$.

(Sperber & Wilson (1986: 158))

(3) *Principle of relevance*

Every act of ostensive communication communicates the presumption of its own optimal relevance.

(*Loc. cit.*)

伝達内容は聴者の処理努力を裏切るものであってはならないし、また発話それ自体も話者の精一杯の表現努力の現れでなければならない。発話行為は、こうした前提を具現する営みであるといえる。

さて、コミュニケーションにおいてこのような「関連性」を達成するのにモダリティがどのように貢献するかを検討してみたい。まず最初にしておかねばならないのはモダリティの類別である。次の例を見られたい。

- (4) a. Mary is an awful bore.
- b. I say it is that Mary is an awful bore.
- (5) Frankly, Mary is an awful bore.

モダリティには、(4a)の基底形(4b)のit isのように命題内容の真偽性に関わる話者の様々な態度を表す類がある。この類は従来命題態度を表すとされてきたものであるが、遂行部分と合わさって〈主張〉や〈質問〉などの発語内行為を表す。この類を以下、真偽性モダリティと呼ぶ。(この類は中右(1994)の「Sモダリティ」に相当する。)一方、(5)のFranklyのような

Quirk *et al.* (1985) のいう *Style Disjunct* は命題内容への直接的な関わりを表さず、むしろ発話態度や発話の形式に対する見通しを表す。この種のモダリティを以下、発話モダリティと呼ぶ。第三のモダリティには、イントネーションが関わる関連性モダリティと呼びたい類がある。次の例を見られたい。(なお、これ以降、抑揚核を担う語は大文字で表記する。また、 \wedge は上昇調を表すものとする。)

- (6) A: Do you like classical music?
 B: I \wedge DO.

(6B) には、一つには命題を対象として (4a) と同等の真偽性モダリティが関わるが、もう一つ、提示しつつある発話それ自体を対象として、次のように発話の当の文脈における「関連性」を問いかけるモダリティが関与する。

- (7) I ask you whether U (=‘I do’; or C) is R(elevant). (U=Utterance;
 C=Constituent of U)

注意しておかねばならないのは、関連性モダリティは ‘I say it is that I like classical music’ という〈主張〉にはなんらの影響も及ぼさないことである。(7)が伝えているのは、「私の‘クラシック音楽が好きだ’という答え (の全部またはその特定部分) はこの場で関連性がありますか」というものであって、もちろん「私はクラシック音楽が好きですか」と尋ねているのではない。関連性モダリティの興味深い点は、話者の発話の当否を問いかける形を借りて、実は ‘What do you mean?’ とか ‘Why do you ask?’ といったような相手の発話意図や発話の根拠を尋ねることが可能になることである。このように「関連性」にじかに言及しその判断を相手に求めたり話者自身が下したりするこのモダリティは、まさにイントネーションの固有の特性である。(なお、本論では、イントネーションは関連性モダリティを、そしてそれのみを表すとする立場を堅持するが、命題の真偽性といっさい関わらないとみなしてよいかどうかについてはここでは論じない。)

以上、モダリティには真偽性モダリティ、発話モダリティ、関連性モダリ

ティの三種があることを述べたが、以下では、これらが(1)で規定された「関連性」にどのように寄与するかを論じてみたい。

2.1. 真偽性モダリティ

「関連性」にはコンテキスト効果の側面と処理の負担の側面とがあったが、上の三種のモダリティはこの側面に等しく負担するわけではない。まず、真偽性モダリティから検討してみよう。このモダリティは命題と連携して伝達内容の中核部分を形成し、コンテキスト効果に直接影響を与えることはいままさら説明を要しない。このモダリティはさらに処理の負担とも無縁ではない。例えば、次の例を見られたい。

- (8) She is an awful bore.
- (9) John's company has collapsed.
- (10) The students will regret that Mr. D. was late, if he was in fact late.
(Green (1989: 76))
- (11) She became pregnant and married. Of course, she married first.
- (12) I'll have to meet a girl this evening. My daughter, actually.
- (13) A: Who was that lady I saw you with last night?
B: It was not a lady. It was my wife.

上の例で、(8)のような She の指示物が一義的に決めにくい文脈ではこのような情報の経路は聴者に処理の負担を強いるし、また(9)の collapsed のような「倒壊した」のか「倒産した」のか語彙的曖昧性を生ずる語句を含む発話はそうでない発話に比べて明らかに負担が増す。また、(10)におけるように、いったん前提として提示された内容の that Mr. D. was late が if 節によって棚上げされる場合も理解にはそれなりの努力が必要となる。(11)のように、出来事の生起順序と発話の提示順序とは類像的に一致するはずだという暗黙の期待が後の発話によって裏切られる場合もコストが高くなる。さらに、(12)のように、わざわざ持って回った言い方をすると、その分だけコストも上がる。(12)の表現効果はこのような処理の負担と引き替えに得られる仕組みになっている。(13B)の前半では、相手の発言に含まれている語の lady を捉え、その語に伴う喚情的意味にユーモラスに挑戦している

が、軽口をたたくつもりがなければ後半の発話だけで十分であろう。以上、真偽性モダリティが処理の負担の側からも「関連性」に貢献することを観察した。

2.2. 発話モダリティ

今度は、発話モダリティが「関連性」にどのように荷担するかを見てみよう。以下、発話モダリティの実例をもう少し挙げておく。

- (14) Seriously, Mary is an awful bore.
- (15) Confidentially, Mary is an awful bore.
- (16) Roughly speaking, I'd say 200.
- (17) Figuratively speaking, he's up to his eyes in paperwork.

発話モダリティには、まず、(14)の *seriously* のような (i) 「一般的な発話態度」を表すものがあり、他に *candidly*, *flatly*, *honestly*, *truly*, *truthfully* がある。また、(15)の *confidentially* や *personally*, *privately* のような (ii) 「発話の縄張り」を表す類がある。さらに、(16)の *roughly* のような (iii) 「発話の的確さ・一般性」を表現するものがあり、*approximately*, *briefly*, *broadly*, *crudely*, *generally*, *simply*, *strictly* などこの類に入る。また、この類には(5)の *frankly* や *bluntly*, *formally/informally* のような「発話の対人関係的確さ」を表す仲間も含められる。さらに、(17)の *figuratively* や *literally*, *metaphorically* のような (iv) 「発話の彩」を表出する類もある。

発話モダリティをやや細かに分類すると以上のようになるが、これらに共通する機能は話者の発話態度や発話の形式に対する見通しを表すことである。命題の真偽性とはいっさい関わらないことはすでに述べた。Wilson & Sperber (1993) によれば、これらの副詞類は概念的意味を持ち、また「高次表意」(‘higher-level explicature’) を表すとされる。これが支持されるとすると、これらの副詞類はコンテキスト効果の側面から「関連性」に寄与する見通しとなる。しかしながら、この予測は正しくない。発話モダリティは、むしろ処理の負担の側から「関連性」に貢献しているのであって、コンテキスト効果への影響力はなきに等しいと見るべきである。このように言う根拠は、

発話モダリティが発話それ自体および/ないしは文脈から自然に提供される情報以上の独自の伝達内容を表さないことにある。このことを先の例に立ち戻って確認しておこう。例えば、ある発話が比喩的な発話か文字どおりの発話かの判定は発話の形と文脈の情報があれば十分可能なのであって、(17)のように比喩的な発話であることをあえて明示する必要はない。この場合の *Figuratively speaking* は余剰的信息を予告しているに過ぎない。他の例も同様である。大まかな物言いか厳密な物言いかはどのみち解釈的に明らかになることであり、(16)のようにわざわざ断るまでもない。また、(5)の *Frankly* の場合も、「話者は *Mary* を貶している」という想定と「人を貶すことは社会的作法に反する」といった想定とが聴者の認知環境にあれば、この発話は言いにくいことをあえて言った「率直な発話」であることは言明されなくても明らかであろう。同様の論法で、(15)や(14)も秘密の発話か否か、あるいは大まじめな発話か否かは発話モダリティによらなくても聴者には復元可能なはずである。このように、発話モダリティはコンテクスト効果の面から「関連性」に寄与することは実質皆無であるとしてよいことがわかった。しかし、もちろん、発話モダリティは言語的に全く無用というわけではない。処理の負担の面から「関連性」に奉仕する可能性が残っているからである。発話モダリティは、発話それ自体および/ないしは文脈から解決されるはずの情報を予告することによって、あらかじめ解釈の幅を限定し、処理を容易にしているのである。

2.3. 関連性モダリティ

さて、今度はイントネーションが担う関連性モダリティが「関連性」にどのように寄与するかに目を向けてみたい。関連性モダリティは、問題の発話の的確なものであるかどうかに関して話者が判断を下したり、聴者に判断を求めたりするものである。すでに述べたように、関連性モダリティは真偽性モダリティとは独立に作用するものであった。(6B)では、上昇調によって発話の「関連性」への〈質問〉が表出されることを見た。真偽性モダリティが関わる命題内容は一定でも、抑揚型が変われば「関連性」判断の様式も変わる。そこで、関連性モダリティの大まかな全体像をつかんでおくために、もう少し他の場合を検討しておきたい(詳しくは河野(1994)を参照)。下降調の場合を見てみよう。(以下、↘は下降調を表す。)

- (18) A: Do you like classical music?
 B: I \ DO.
 (19) I say that U (= 'I do'; or C) is R.

(18B) は (19) に示すように「発話 (の全部またはその構成素 C) が '関連性' をもつ」ことを〈主張〉している。関連性モダリティのうち、(6B) や (18B) は発話の「関連性」をじかに判断する場合であるが、もう一つ「関連性」意識を判断する場合がある。これは、「U が R である」ことを云々するのではなく、「U が R であることを聴者が意識している」ことを〈主張〉ないしは〈質問〉する場合である。次の例を見てみよう。

- (20) John bought a \ COMPUTER, you \ KNOW.
 (21) I say you are aware that U (= 'John bought a computer'; or C) is R.
 (22) John bought a \ COMPUTER, you / KNOW.
 (23) I ask you whether you are aware that U (= 'John bought a computer'; or C) is R.

(20) では、相手が発話の「関連性」に気づいている、すなわち怠りなく会話に臨んでいることを話者が認めており、(22) では、発話の「関連性」への自覚を尋ねることによって「関連性」への (いっそうの) 注意を促している。(ついでに、(22) に関わっているモダリティは、未完結な発話や無標の Yes-no 疑問文と同種のものであることに注意しておこう。)

さて、概略上のように特徴づけられる関連性モダリティは、どのようにして「関連性」を支えているのであろうか。関連性判断は発話の外形と内容の両面にわたる的確性を対象とし、関連性意識の判断は聴者の (もっとも生々しい音声刺激を含めた) 発話への関わり方の的確性を対象とするものである。その限りでは、このモダリティはきわめて限定された役割を担うにすぎないが、それでも他のモダリティをもって置き換えることはできない。(6B) 対 (18B)、あるいは (20) 対 (22) に見られたモダリティの様態の違いはひとえにイントネーションがもたらしたものであり、文脈情報から引き出されたものではない。また、先に検討した発話モダリティとは違って、文脈情報と

重複する内容を表出するのでもない。この事実だけをもってしても、イントネーションがささやかにではあるが確かにコンテキスト効果に貢献することを認めるに十分である。イントネーションのコンテキスト効果への影響は豊富な文脈の含意によって増幅される。例えば、(7)のように相手に発話の関連性判断を問いかけることによって、文脈的に「話者の判断の保留」や「話者のためらい」を含意することができる。また、話者が発話の「関連性」に肯定的にコミットしつつ相手に関連性判断を求めれば、「聴者への勇気づけ」の態度が伝達される。さらに、(23)のように発話が「関連性」をもつことに相手が気づいているか否かを問うことによって、「聴者への注意の喚起」を暗示することができる。あるいはまた、話者が、聴者は当の発話が「関連性」をもつことに気づいているべきであるという判断をもちつつ同様の「関連性」意識の判断を求めることによって、「聴者への批判・非難・抗議」といった強い態度が導き出される。(本論では、イントネーションにおそらくは考えうるもっとも原初的な機能を付与しており、例えば Gussenhoven (1983) の提案する‘Addition’ (‘背景 (=共有知識) への情報の付加’), ‘Selection’ (‘背景からの情報の選択’), ‘Testing’ (‘情報が背景に属するか否かの判定’) といった機能は、すでにながしかの文脈的含意が入り込んでいるものとする。) 以上、イントネーションがコンテキスト効果の側面から「関連性」に寄与することを見た。

イントネーションには、どのような音調形が伴われるかも大事であるが、発話のどの部分に抑揚核が置かれるかも重要である。抑揚核はイントネーションと焦点強勢 (=文強勢) との交点であるので、ここでは焦点強勢の観点から「関連性」との関わりを議論してみたい。焦点強勢は「関連性」の高い項目をそうでない項目から卓立させることによって、処理に手がかりを提供し、処理の負担を軽減するのに役立つ。Sperber & Wilson (1986) は、焦点強勢は次のように規定される「前景情報」を表示し、それを「後景情報」から際立たせるものとしている。

- (24) ... background information is information that contributes only indirectly to relevance, by reducing the processing effort required; it need be neither given nor presupposed. Foreground information is information that is relevant in its own right by having contextual

effects; it need not be new.

(Sperber & Wilson (1986: 217))

これによって、例えば次のような例の説明を試みている。

(25) (a) I'm sorry I'm late. (b) My CAR broke down.

(26) (a) I'm sorry I'm late. (b) My car was BOOBY-trapped.

((25), (26) ともに (Sperber & Wilson (1986: 211)))

(26 b) では、強勢のない My car は後景情報を表し、これを基点にして、よりコンテキスト効果をもつ前景情報の was BOOBY-trapped が提示されており、情報提示の手順は効率的である。また、(25 b) では、My CAR 自体が焦点強勢を帯びることによって前景情報を表し、これに続く broke down は先行する項目から予測可能な情報を伝えているだけなので強勢の点からも目立たなくなっている。以上が Sperber & Wilson の説明の要点である。焦点強勢がコンテキスト効果をもつ情報を表出することには異論はないが、焦点強勢を帯びない項目がコンテキスト効果をもたないかどうかについては議論の余地がある。(26 b) の My car は確かに後続の項目への後景情報を提供しているが、(25 b) と並行的にコンテキスト効果をもつとして不都合なことはなにもないし、むしろそうみなした方が整合性が高い。(25b) と (26 b) の主語名詞句の真の違いは、前者が先行発話に対して前景情報を提供しているのみであるのに対して、後者は先行発話に対しては前景情報を提供し後続発話 (の断片) には後景情報を供給していることにあるとみるべきであろう。焦点強勢と情報を短絡的に結びつけることは避けなければならない。(Sperber & Wilson は一つの発話に一つの主要な強勢が現れる場合のみを取り上げており、Bolinger (1989) の指摘する複雑な事象に気を配っていない。)

このようにして、イントネーションは、一方で、抑揚核＝焦点強勢の配置によってコンテキスト効果の高い項目とそうでない項目とを判別する手だてを提供し、処理の効率を高めている。もう一方で、抑揚型の使い分けによって、発話の「関連性」もしくは「関連性」意識について話者の判断を述べたり聴者の判断を求めたりすることで、「関連性」に対する話者の姿勢を表明

し、命題態度とは趣を異にするコンテキスト効果をもたらしている。イントネーションのこの二つの機能は、(2)に示した最適な関連性の前提を具現するものであり、働きの点から見て見事な調和をなしているといえる。

3. 結 論

本論の論点をまとめると次のようになる。「関連性」にはコンテキスト効果の側面と処理の負担の側面とがあるが、真偽性モダリティはこの両面に積極的に貢献する。発話モダリティは、文脈情報と余剰的な情報を予告することによって、コンテキスト効果には実質的にも寄与しないが、処理の負担には大いに貢献する。イントネーションの担う関連性モダリティは、抑揚型の表す発話態度によってコンテキスト効果に作用し、抑揚核の表す情報構造の図式によって処理の負担に作用する。

本論で取り上げた三種類のモダリティは相互に補完しあっている。真偽性モダリティは、いかに意を尽くすか、すなわちいかに「関連性」を最大限に引き上げるかがその任務である。一方、関連性モダリティは、いかにしてコミュニケーションを成立させるか、すなわちいかにして「関連性」を最低限の形で保証するかにかに原初的な役割がある。もちろん、関連性モダリティは、文脈の倍音を伴って瞠目すべき役割を持つにいたる。さらに、発話モダリティは、発話を話者の立場から特徴づけ、発話にインデックスを付与することによって、それ相応の役柄を演じている。

参考文献

- Bolinger, D. (1986) *Intonation and Its Parts*, Stanford University Press, Stanford.
Bolinger, D. (1989) *Intonation and Its Uses*, Stanford University Press, Stanford.
Green, G. M. (1989) *Pragmatics and Natural Language Understanding*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale.
Gussenhoven, C. (1983) *On the Grammar and Semantics of Sentence Accents*, Foris, Dordrecht.
今井邦彦 (1991) 「認知環境とイントネーション」, 『言語』第20巻第10号, 30-37。
河野武 (1992) 「多重主題構造論 (再考)」, 『大妻レビュー』第25号, 63-76。
河野武 (1994) 「『関連性』とイントネーション」, 『大妻レビュー』第27号, 75-

89。

- Ladd, D. R. (1978) *The Structure of Intonational Meaning*, Indiana University Press, Bloomington.
- Lyons, J. (1977) *Semantics II*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館, 東京。
- O'Connor, J. D. and G. F. Arnold. (1973) *Intonation of Colloquial English*, 2nd ed., Longman, London.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Sperber, D. and D. Wilson. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Basil Blackwell, Oxford.
- Vandepitte, S. (1987) "A Pragmatic Function of Intonation: Tone and Cognitive Environment," *Lingua* 79, 265-97.
- Ward, G. and J. Hirschberg. (1985) "Implicating Uncertainty: The Pragmatics of Fall-Rise Intonation," *Lg.* 61, 747-76.
- Wilson, D. and D. Sperber. (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.

